古代寺院の瓦

～畿内の古代寺院の瓦とその頃の吉備～

水川　慶紀

◎はじめに

法隆寺や興福寺、東大寺など一度は訪れたことがある古代寺院。こうした寺院は仏教が伝来し花開いた日本において広がりをみせた寺院の一つである。このような寺院の屋根は、多くの瓦で覆われている。古代寺院にみられる瓦は、どのように始まり、広がったか、畿内の寺院を中心に説明するとともにその頃の吉備（特に岡山市域）の寺院の瓦はどうであったか概観する。

◎史料が示す瓦作りの始まり

〇～日本における瓦の導入～

「・・・元年春三月、立大伴糠手連女小手子、爲妃、是生蜂子皇子與錦代皇女。是歳、百濟國遣使幷僧惠總・令斤・惠寔等、獻佛舍利。百濟國遣恩率首信・德率蓋文・那率福富味身等、進調、幷獻佛舍利・僧聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等・寺工太良未太・文賈古子・鑪盤博士將德白味淳・瓦博士**麻奈文奴・陽貴文・陵貴文・昔麻帝彌**・畫工白加」。

→崇峻天皇元年（587）４名の瓦博士が百済よりやってくる。ほかに寺工・露盤博士・畫工も渡来（『日本書紀』より）。

※史料によって表記が異なる。　２名であったとする説もあり。

・瓦博士『日本書紀』　麻奈文奴　陽貴文　陵貴文　昔麻帝弥
・瓦　師『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』　麻那文奴　陽貴文　布陵貴　昔麻帝弥

◎瓦の分類

〇丸瓦・軒丸瓦：（図１）
端部形状による違い：有段（玉縁式）と無段（行基式）　（図２）
瓦当文様：蓮華文、巴文、文字、梵字、仏像、家紋、など
蓮華文（図３）：単弁と複弁
単弁：無子葉（素弁）、有子葉（単弁）、二重子葉（重弁）、
文様区：内区、外区、中房、外区内縁、外区外縁
文様要素：蓮子、蓮弁、珠文、圏線、（面違い/線）鋸歯文
部分名称：凹面、凸面、玉縁部、瓦当部、瓦当面、瓦当裏面、

○平瓦・軒平瓦：（図４）
　瓦当顎部：直線顎、段顎、曲線顎　（図５）
　瓦当文様：重弧文、忍冬文、唐草文、剣頭文、巴文、文字、など
　　唐草文：忍冬唐草文、変形忍冬唐草文、偏行唐草文、均整唐草文、葡萄唐草文　（図６）
　文様区：内区、外区、脇区
　文様要素：珠文、中心飾

◎飛鳥・白鳳期の瓦（図７）
○～はじまりの軒丸瓦～「花組」と「星組」（百済系）
・飛鳥寺の主要瓦で日本における最初の瓦型式。
・豊浦寺など飛鳥地域や山背地域などにみられる。
・百済の瓦博士より伝わった文様で、2 系統みられるのは、瓦博士の系統の違いによる？
・花組と星組のルーツ。
「花組」…先端に切り込みのある花弁をもつ
　　瓦当裏面が薄くて平坦
　　丸瓦は行基式
　　主な寺窯：飛鳥寺、和田廃寺、高麗廃寺、衣縫寺、姫寺廃寺、海龍王寺、北野廃寺、豊浦寺、飛鳥寺瓦窯、幡枝元稲荷瓦窯、北野廃寺瓦窯
「星組」…花弁の先端に珠点を配する
　　瓦当裏面の中央部に膨らみをもち、回転ナデの痕跡を残る
　　丸瓦の玉縁式
　　主な寺窯：飛鳥寺、豊浦寺、奥山廃寺、巨勢寺、只塚廃寺、斑鳩寺、和田廃寺、四天王寺、鞍岡廃寺、楠葉平野山瓦窯、豊田窯、北倭村窯、北垣内窯

○～はじまりの軒平瓦～（図８）
・法隆寺若草伽藍で採用された瓦。
・飛鳥寺や豊浦寺など若草伽藍以前の寺院には軒平瓦は使用されていない。
・手彫り忍冬文の軒平瓦。
・その後、手彫りからスタンプでの施文に変化する。

○豊浦寺式軒丸瓦「雪組」（高句麗系？古新羅系？）（図９）
・蘇我本宗家の尼寺である豊浦寺のほか、隼上り窯などでみられる瓦。
・花弁に刀の鎬のような凸線をもち、弁間には珠点や楔形の間弁を配する。
　※近年では、新羅の影響で古新羅系との説もある（奈文研 2021）。
・主な寺窯：豊浦寺、和田廃寺、北野廃寺、九頭神廃寺、拝志廃寺、船橋廃寺、土師廃寺、衣縫廃寺、秦廃寺、隼上り瓦窯、池山瓦窯、楠葉平野山瓦窯

〇奥山久米寺式軒丸瓦（図 10）
・幾何学形の角張った花弁（剣尖形）を八弁に割り付け、弁端に珠点をもち、中房はなで肩の円柱形か半球形を呈する。
・飛鳥寺「星組」系統文様　→　弁端に珠点をもつ点。
・飛鳥寺の星組は弁数が奇数であるが、奥山久米寺式は八弁に割り付ける点が異なる。

・備中の末ノ奥窯（総社市）のほか、津寺遺跡、加茂政所遺跡、川入遺跡で出土（図 11）。
※遺跡出土事例は、瓦当面のみ。

〇船橋廃寺式軒丸瓦（図 12）
・弁端が尖り、花弁が反転する様を表現するもの。
・奥山久米寺式よりやや後出する（630 年ころか）。

・備中の末ノ奥窯（総社市）でも出土例あり（図 13）。

〇山田寺式軒丸瓦（図 14）
・山田寺式軒丸瓦＝重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。
・船橋廃寺式の花弁形を呈し、子葉がつくもの（単弁形式）。
・船橋廃寺式と比較して、瓦当径が大きく、蓮子が 1+8 となる
・列島内に広く波及する→契機 7 世紀中葉と 7 世紀末～8 世紀初か。

〇川原寺式軒丸瓦（図 15）
・川原寺式軒丸瓦＝面違鋸歯文縁複弁八弁軒丸瓦。
・複弁蓮華文の誕生→それまでの素弁・単弁から複弁形式を採用。
・列島内に広く波及する。

〇法隆寺式軒瓦（図 16）
・線鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐草文軒平瓦。
・西院伽藍創建時の軒瓦。
・軒丸瓦のうち、単弁のなかに二つの子葉が入る、単弁複子葉のものもある。

〇紀寺式軒丸瓦（図 17）
・雷文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦。
・小山寺式軒丸瓦とも称される。

○本薬師寺式軒瓦（図 18）
・複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、外区の文様が内縁と外縁に分かれるもの。
　→外縁：線鋸歯文　　内縁：珠文
・外区を外縁と内縁に分かつタイプは藤原宮や平城宮においても主流となる。
・軒平瓦は内区に偏行唐草文で、外区は上面に珠文、脇区と下面に鋸歯文を配する。
・上記の軒平瓦は、藤原宮において引き継がれるが、平城宮では採用されない。

○大官大寺式（文武朝）（図 19）
・珠文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせ。
・軒丸瓦は直径 20cm を超える大きさが特徴。
・均整唐草文は平城宮で引き継がれる。

◎奈良期の瓦
○平城宮式軒瓦（図 20）
・基本として藤原宮式の軒先瓦の系統を引く。
・軒丸瓦は、複弁蓮華文で中房には二重に置き、外区を内外縁に分け、内区に珠文、外区に鋸歯文をめぐらせたものが主流。全体に小型化し中房の蓮子は一重になる。
・軒平瓦にかんしては、均整唐草文が主流となる（文武朝大官大寺の影響）。
・５期に分類される。文様形態や軒平瓦の顎部形態等が年代判別の手がかりとなる。
　軒丸瓦の変遷…蓮華文が複弁から単弁に、間弁は古い時期にあるものも多いが、徐々に消失する。外区外縁の鋸歯文も凸鋸歯から線鋸歯になり、奈良期後半には外縁の断面形が三角形を呈したものが直立化するに伴い、鋸歯文はなくなっていく。
　軒平瓦の変遷…外区が珠文と鋸歯文の構成から珠文のみの表現に変化する。

○大安寺式（図 21）
・単弁十二弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせ
　→軒丸は中房の蓮子は一重で、外区は外縁に鋸歯文、内縁に珠文を配する。
　→軒平は牛角状の中心飾りの左右に唐草が 5 回反転する。

○興福寺式（図 22）
・複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせ。
　→軒丸は中房が大きく蓮子を二重にめぐらす。間弁があり蓮弁は盛り上がり、弁端で反りあがる。外区内縁に大ぶりの珠文を配し、外縁に線鋸歯文をめぐらす。
　→軒平は下に向けて巻き込む二葉が相対して下垂した中心飾りで、左右に唐草が 3 回反転する。外区上、脇部に杏仁形の珠文、下部に線鋸歯文を配する。

○東大寺式（図 23）
・複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせ。
　→軒丸は外区外縁の鋸歯文をなくし、中房の蓮子や外区珠文が大ぶりとなる。
　→軒平は宝相蓮華文の中心飾りに、左右に数多くの支葉が展開し華やかな文様。

◎吉備地域の古代寺院の瓦

　吉備地域における初期瓦は、備中でみられる。その後、備前、備中、美作の各国で 7 世紀前半から中頃にかけて造営が開始される。造営時期にかんしては、全国的に見れば早く、吉備地域は寺院造営の先進地域と評価され、この背景には蘇我氏などの中央との関係があり、受け入れ側として在地豪族と先端技術をもつ渡来系グループの存在が考えられている（湊・亀田 2006）。以下、吉備地域の瓦の特色と時期変化を提示し、加えて岡山市域の古代寺院の瓦を概観する。

○吉備地域の瓦の特色と時期変化
～飛鳥・白鳳期～
●7 世紀前半～中葉
・最古の瓦は、備中加茂政所遺跡、津寺遺跡、川入遺跡、末ノ奥瓦窯の奥山久米寺式軒丸瓦。
　→星組の系譜をひく、角端点珠瓦。7 世紀第Ⅰ四半期後半～第Ⅱ四半期頃か。
・奥山久米寺式軒丸瓦とほぼ時期をおかず、畿内非主流派とされる瓦の採用。
　→備中秦原廃寺や大崎廃寺でみられる瓦。
・備前賞田廃寺や須恵廃寺、備中栢寺廃寺で朝鮮半島との関わりが推測される瓦の使用。
●7 世紀後半
・山田寺式や川原寺式、法隆寺式などの列島に広く普及する瓦はほぼ吉備に見られない。
・吉備では「備中式瓦」や「水切り瓦」が展開する（図 24）。
　→「備中式瓦」：重弁蓮華文の外区に外向する鋸歯文帯と連珠文帯をめぐらせたもの。
　　備中（6 寺院）と摂津（2 寺院）の 8 寺院に広がる。製作技法から伯耆上淀廃寺の瓦工が備中に移動し、製作に関与したか（妹尾 2010）。
　→「水切り瓦」：瓦の下端が三角形状に尖ったもの。主に備後北部でみられる。
　　※寺町廃寺式軒丸瓦とも称される。
～奈良期～
・平城宮式の軒瓦が広く採用されるようになる。
・吉備地域独自の瓦もみられる。

○主な吉備地域の古代寺院の瓦（岡山市域）
　図表参照

◎まとめ・おわりに

＜参考文献＞

有吉重蔵 2018『古瓦の考古学』ニューサイエンス社

上原真人2015『瓦・木器・寺院―これまでの研究　これからの考古学―』すいれん舎

岡山県教育委員会1982『吉岡廃寺』岡山県文化財保護協会

岡山県史編纂委員会1986『岡山県史　考古資料』

岡山市史編集委員会1962『岡山市史』（古代編）岡山市役所

梶原義実2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館

草原孝典2022「軒瓦からみた古代寺院と国府、国分寺の関係―備前国上道郡をケーススタディとして―」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第14 号, 岡山市教育委員会

古代瓦研究会2000『古代瓦研究Ⅰ―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで―』奈良文化財研究所

古代瓦研究会2005『古代瓦研究Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』奈良文化財研究所

古代瓦研究会2009『古代瓦研究Ⅲ―川原寺式軒瓦の成立と展開―』奈良文化財研究所

古代瓦研究会2009『古代瓦研究Ⅳ―法隆寺式軒瓦の成立と展開、雷文縁・輻線文縁・重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開―』奈良文化財研究所

古代瓦研究会2010『古代瓦研究Ⅴ―重弁蓮華文軒丸瓦の展開、藤原宮式軒瓦の展開―』奈良文化財研究所

清野陽一・石田由紀子『屋根を彩る草花　飛鳥の軒丸とその文様』（独）奈良文化財研究所飛鳥資料館

妹尾周三1991「安芸・備後の古瓦（その１）」『古文化談叢』26,九州古文化研究会

妹尾周三2010「備中の重弁蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅴ―重弁蓮華文軒丸瓦の展開、藤原宮式軒瓦の展開―』奈良文化財研究所

竹中大工道具館2017『千年の甍　古代瓦を葺く』竹中大工道具館企画展展覧会図録

出宮徳尚1989「和気氏氏寺の予察的小考」『古代吉備』第11 集, 古代吉備研究会

出宮徳尚・伊藤晃・岡本寛久・駒井正明1992「集成17　瓦当文」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社

奈良国立文化財研究所1974『基準資料Ⅰ　瓦編１　解説』

奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会1996『平城宮・藤原宮出土軒瓦型式一覧』

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1999『蓮華百相』

菱田哲郎2019「遺跡からみた古代寺院の機能」『古代寺院』岩波書店

湊哲夫・亀田修一2006『吉備の古代寺院』吉備人出版社

森郁夫1986『瓦』ニューサイエンス社

森郁夫2009『日本古代寺院造営の諸問題』雄山閣

森郁夫2014『一瓦一説』淡交社

山崎信二2011『古代造瓦史―東アジアと日本―』雄山閣

国立公文書館デジタルアーカイブ『日本書紀』https://www.digital.archives.go.jp/img/4171429#25 (最終閲覧日2026.06.19)

報告書：岡山市教育委員会1975『幡多廃寺発掘調査報告』/岡山市教育委員会2004『ハガ遺跡』/岡山市教育委員会2005『史跡賞田廃寺跡―史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告―』/岡山市教育委員会2015『幡多廃寺』/岡山市教育委員会2026『川入中撫川遺跡』